

主体的に運動に取り組む児童の育成 —運動嫌い・体育嫌いの児童に着目して—

教育実践力高度化コース

16AD011

平澤 亜美

【指導教員】 古田 久 上園 竜之介 有川 秀之

【キーワード】 技能向上 受容感 有能感 能力観 レジリエンス

I. はじめに

生活の利便化や生活様式の変化は日常生活における身体を動かす機会、体を動かす必要感を減少させている。このような時代背景のもと、子どもたちに生涯にわたってたくましく生きるための健康や体力の基礎を培う場として、「学校体育」がもつ重要性は大きい。中央教育審議会答申（2016）では、現行学習指導要領の成果と課題として、「運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下傾向に歯止めが掛かったこと」に一定の成果が見られる一方で、「運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること」を指摘している。また、平成28年度体力・運動能力等調査結果（スポーツ庁、2016）では、「運動やスポーツが嫌い」の割合は、平成26年度以降、小・中学校の男女ともに増加し続けているという結果が示されている。

予測困難な時代の中で、自らが目的をもって進んでいくために、主体性は不可欠である。学校体育においては、生きる力の基礎となる体力の保持増進として、主体的に運動に取り組む児童の育成をめざしている。この学校体育において、運動や体育授業が嫌いな子どもたちの主体性を育むことは喫緊の課題である。

II. 運動嫌い・体育嫌いの捉え方

「運動嫌い・体育嫌い」についてはこれまで多くの研究が行われてきた。その中で、「運動嫌い・体育嫌い」は同じ枠の中にあると考えるものと、「運動嫌い・体育嫌い」を別のものであると考えるものに分かれる。

1. 運動嫌いと体育嫌いの関連性

波多野・中村（1981）は、運動嫌いの背景として、「運動能力に対する劣等感」「内向的・消極的な性格傾向」「個人差を考慮しない体育授業」「体育教師への不満」「上手・下手による能力評価」「運動場面での喜び経験の欠如」の6つを挙げている。これらは、運動嫌いを生み出す背景の一部に体育が含まれていることを示している。また、「運動嫌いを生み出す体育嫌い」に焦点化し、体育嫌いを生み出す要因について研究しているものも多い。立木（1997）は、体育嫌いを生み出す原因として「教師の指導の仕方や教師の人間性、さらには体育授業における苦痛的経験等が考えられる」と示している。賀川・竹岡（2002）は、小学校高学年に焦点を当てて調査し、「体育嫌いを変容させるためには、児童に『運

動効力感』を持たせることが重要であると同時に、仲間や教師からの受容体験、身体的苦痛を与えないようにさせる、仲間に嫌な思いをさせないことなどについて留意が必要である」と示している。以上の先行研究から、「運動嫌い」を生み出す要因としては、「体育」の存在が大きく、その中でも学習者個人に関わる要因、教師に関する要因、体育授業の指導過程における要因が挙げられる。

2. 運動嫌いと体育嫌いの違い

吉川ほか（2012）は、先行研究の検討から、運動嫌い・体育嫌いを明確に定義して研究する必要性を示している。そこで運動嫌いとは、「子どもの自由な身体活動から生まれる遊びや、子ども自らの意思で行われる遊び、部活動（クラブ活動）に対して生活環境や体育授業などあらゆること（原因）により、非好意的あるいは消極的態度を形成し、運動することに対して拒否的な心理状態になること」である一方で、体育嫌いとは、「運動やスポーツを手段として、計画的・組織的に体育教師または、担任（小学校の場合）が行う授業に対して、体育学習場面における特定のことがら（原因）により非好意的あるいは消極的態度を形成し、学習者が拒否的な心理状態になること」と、定義を明確化したうえで調査を行った。「体育」と「運動」の違いを明確にして調査をすることがどこに「嫌い」の要因があるのかを明確にすることにつながると考えられる。

3. 運動嫌いと体育嫌いを生み出す要因の検討

深谷ほか（2000）は、「運動の苦手な子は本当に苦手なのか、苦手意識なのか」を検討するにあたり、①運動の好き・嫌い、得意・苦手の関係、②実際の運動能力（記録数値）、③家族がするスポーツ、④放課後の行動、⑤幼少期の運動体験、⑥運動の苦手な子の自己像、⑦運動の苦手な子のイメージ、⑧友人関係、等から児童の実態に迫った。①については、「運動の好き・嫌い」と「運動の得意・苦手」はほぼ同じ回答になる傾向があった」という結果が示されている。運動嫌い・体育嫌いを生み出す要因として、得意・苦手意識がどのように生まれたのかを具体的に想起させていくことが手掛かりになると考えられる。また、生活習慣や家族との運動経験等を調べていくことは、個人に関わる要因の分析において有効であると考えられる。

III. 研究の目的と枠組み

体力を高める必要性、体を動かすことの楽しさ・心地よさを知ることは、たくましく生きるための基礎となり、次期学習指導要領で求められる資質・能力である「豊かなスポーツライフを実現する力」の基盤となる。これまでも、学校体育期における体育・運動への態度やその要因に関する研究は多く、それらをもとに、指導法、指導における視点が数多く示されてきた。時代の変化に伴い、子どもたちの実態も取り巻く環境も大きく変化しつつある今、さらに焦点化して研究を進めていく必要がある。

本研究の目的は、運動の二極化において問題とされている「運動嫌い・体育嫌い」の児童の実態、傾向を明らかにし、学校体育の改善・充実を図ることにより、主体的に運動に取り組む児童の育成を目指すことである。

上記の目的を達成するために、1年目は、運動嫌い・体育嫌いの児童への質問紙調査をもとに、その実態や嫌いになる要因を検討した。2年目は、その要因をもとに、学校現場でどのように取り入れていくかを整理し、実践研究を進めた。

IV. 研究1：運動・体育の好き嫌いに関する実態の調査

1. 目的

本研究の目的は、「運動嫌い・体育嫌い」の児童の実態、傾向を明らかにすることである。

2. 方法

1) 調査対象・時期

小学2年生126名、4年生125名、6年生125名を対象に、2016年12月5日～12月22日の間に行った。このうち、未回答、重複回答のあるものを除いた、小学2年生男子56名・女子43名、4年生男子54名・女子52名、6年生男子55名・女子62名、合計322名のデータを分析の対象とした。体育は、2年間を見通した指導計画が作成されているため、2・4・6年生を対象とした。

2) 質問項目

運動嫌い・体育嫌いを調査するにあたり、調査対象である児童が、運動・体育の場面を想起して「好き・嫌い」を答えることができるよう、表1・表2に示す通り、「問1→学校の休み時間や家に帰ってから、または休みの日などの運動についての好き・嫌い」「問2→体育の授業についての好き・嫌い」の2つに分けて作成した。また、これらについての質問項目は、調査を行った学校の体育年間指導計画の単元内容をもとに作成した。運動場面の質問項目については、単元で扱っている運動に関連する日常の遊び・動きを取り上げて構成した。これらの項目について、「4・すごくあてはまる、3・ややあてはまる、2・あまりあてはまらない、1・ぜんぜんあてはまらない」の4件法で質問した。

3) 分析方法

はじめに、運動・体育の好き・嫌いの関連を、スピアマンの順位相関係数を用いて分析した。

次に、運動・体育の好き嫌いについて、学年及び性別との

関連を分析するため、2要因分散分析を行った。

運動・体育の好き嫌いとは質問項目との関連は、スピアマンの順位相関係数を用いて学年ごとに分析しを行った。

さらに、4段階尺度の「4・4（運動好きの体育好き）」「1・1（運動嫌いの体育嫌い）」を抽出し、好き群と嫌い群のグループ間の差を見るために対応のないt検定を行った。

嫌い傾向の児童「1・1」「1・2」「2・1」「2・2」については、KJ法でカテゴリーに分け、嫌いを生み出す要因を分類した。

表1 2年生質問紙(運動)

学校の休み時間や家に帰ってから、または休みの日のことについて教えてください。				
	すごくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ぜんぜんあてはまらない
1 うんどうがすきだ。	4	3	2	1
2 外であそぶがすきだ。	4	3	2	1
3 おにごっこやドロケイであそぶがすきだ。	4	3	2	1
4 てつぼうであそぶがすきだ。	4	3	2	1
5 ゆうぐであそぶがすきだ。	4	3	2	1
6 かいだんとエスカレーターならかいだんをつかう。	4	3	2	1
7 ゲームであそぶのはすきではない。	4	3	2	1
8 なわとびであそぶがすきだ。	4	3	2	1
9 長なわであそぶがすきだ。	4	3	2	1
10 サッカーやボールけりをしてあそぶがすきだ。	4	3	2	1
11 ドッジボールやボールなげをしてあそぶがすきだ。	4	3	2	1
12 一人よりも、たくさんのお友達とあそぶがすきだ。	4	3	2	1
13 うみやプールで水あそびをするのがすきだ。	4	3	2	1
14 まいにちたくさん体をうごかしている。	4	3	2	1
15 あさごはんをまい日たべている。	4	3	2	1
16 はやくねている。	4	3	2	1
17 すききらいなくなんでもたべている。	4	3	2	1
18 かぞくと外であそぶことがよくある。	4	3	2	1

表2 2年生質問紙(体育)

学校の体育の授業について教えてください。				
	すごくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ぜんぜんあてはまらない
1 たいいくのじゅぎょうがすきだ。	4	3	2	1
2 みじかいきより(50mくらい)を走るのがすきだ。	4	3	2	1
3 長いきより(じきゆう走)を走るのがすきだ。	4	3	2	1
4 リレーがすきだ。	4	3	2	1
5 ハードルリレーがすきだ。	4	3	2	1
6 おにごっこやしっぽとりがすきだ。	4	3	2	1
7 てつぼうがすきだ。	4	3	2	1
8 なわとびがすきだ。	4	3	2	1
9 長なわとびがすきだ。	4	3	2	1
10 マットうんどうがすきだ。	4	3	2	1
11 とびばこうんどうがすきだ。	4	3	2	1
12 ボールけりゲームがすきだ。	4	3	2	1
13 ボールキープゲームがすきだ。	4	3	2	1
14 ボールなげゲームがすきだ。	4	3	2	1
15 綱かになりきったりへんしんしたりするひょうげんうんどうがすきだ。	4	3	2	1
16 おんがくに合わせてダンスをするのがすきだ。	4	3	2	1
17 プールで水あそびがすきだ。	4	3	2	1
18 はじめてやるうんどうがあるとわくわくする。	4	3	2	1
19 うんどう会がすきだ。	4	3	2	1

3. 結果と考察

1) 運動の好き・嫌い」と「体育の好き・嫌い」の関連

スピアマンの順位相関係数で分析したところ、すべての学年で「運動の好き・嫌い」と「体育の好き・嫌い」に有意な相関が認められた（2年生 $r_s=0.584$, 4年生 $r_s=0.773$, 6年生 $r_s=0.836$, $p<0.01$ ）。学年が上がるにつれて相関が強くなっていることから、学年が上がるると体育と運動遊びを同じとらえていることがわかる。低学年は、休み時間や放課後の遊び時間が多いのに対し、高学年になるほど十分な遊び時間が確保できていない現状がある。そのため、「運動＝体育」とらえていることが考えられる。これらの結果から、学年が上がるほど、体育での経験が運動の好き嫌いに大きく影響を与えることが推定できる。

2) 「運動・体育の好き・嫌い」と学年・性別

図1に、運動の好き嫌い」と学年×性別の2要因分散分析を行った結果を、図2に、体育の好き嫌い」と学年×性別の2要因分散分析を行った結果を示した。検定した結果、「運動の好き・嫌い」は、学年×性別の交互作用効果が有意ではなかった（ $F(2, 316)=1.776$, $p>0.05$ ）。「体育の好き・嫌い」も、学年×性別の交互作用効果が有意ではなかった（ $F(2, 316)=2.888$, $p>0.05$ ）。しかし、低下傾向は見られた。

学年進行に伴う「運動嫌い・体育嫌い」の先行研究と比べてみると、吉川ほか（2012）の、「体育嫌いは学年進行に伴う増加があるもの、運動嫌いには学年進行に伴う変化は見られない」という報告の「運動嫌い」についてを支持する結果となった。「体育嫌い」に学年の差がなかった理由としては、本研究が小学生のみを対象としていることが考えられる。性別においても、効果は有意ではなかったが、図1・図2の結果ともに、6年生女子は下がる傾向があることが明らかになっている。吉川ほか（2012）、賀川・竹岡（2002）らの先行研究で示された「女子は体育授業に非好意的」という結果をもとに、今後の研究においてさらに「運動嫌い・体育嫌い」の女子に着目して、嫌いな要因に迫っていく必要がある。

また、本研究の結果と、立木（1997）の「小学校時代に運動に否定的感情をもっていた人の40%以上が、大学時代にも運動に否定的感情を持っている」という結果から、小学校段階、また、できるだけ早い段階で「運動嫌い・体育嫌い」を

生み出さないように手立てを講じる必要があると推定できる。

3) 「運動・体育の好き嫌い」と質問項目

表3・表4に「運動が好きだ」「体育が好きだ」と質問項目におけるスピアマンの順位相関係数を示した。質問項目が多いため、ここにはその一部を示した。

「サッカーやボール蹴りで遊ぶのが好きだ」「ボール蹴りゲームが好きだ」において有意な相関が認められた理由として2つ挙げられる。一つ目は、ボールを蹴る経験である。文部科学省（2002）は、体力低下の原因として、時間、仲間、空間の減少を挙げている。ボールを思いきり蹴ったりする遊び場は少なく、学校や体育で行う以外はやらない、という児童が多いことが推測できる。「好き・嫌い」は運動の楽しさを経験できたかも大きく影響し、その代表的な運動が「ボール蹴り・サッカー」であると考えられる。

「初めてやる運動があるとワクワクする」は、4・6年生のみ有意な相関が認められた。2年生には有意な相関が認められないことから、様々な運動・体育での経験が影響していることが推測できる。多くの先行研究では、体育嫌いを生み出す要因として「体育授業での苦痛」や「仲間からの疎外体験」などが挙げられているが、これらは経験の積み重ねによって生まれるものである。本研究の結果においても、運動や体育授業における経験が運動への挑戦・意欲に関係することが推定できる。さらに、運動・体育における経験について、古田（2014）は、運動不振学生の体育授業における「つまずき」経験を明らかにし、種目横断的観点から「パーソナリティ面において臆病で恐怖心が高い傾向」を重要すべき「つまずき」の一つとして挙げている。また、「効果的な運動技能の学習指導を行うためには、この『つまずき』を把握することが重要となる」と示しており、これは、「運動嫌い・体育嫌い」の児童理解においても重要な視点として考えられる。また、「運動・体育の好き・嫌い」と相関がある項目は、同じ運動種目のものが多いことから、体育授業におけるアプローチが運動全般に対する意識の変化につながることを期待でき、「運動嫌いの体育好き」の存在が、有効な手立てを導き出すうえで重要になると考えられる。

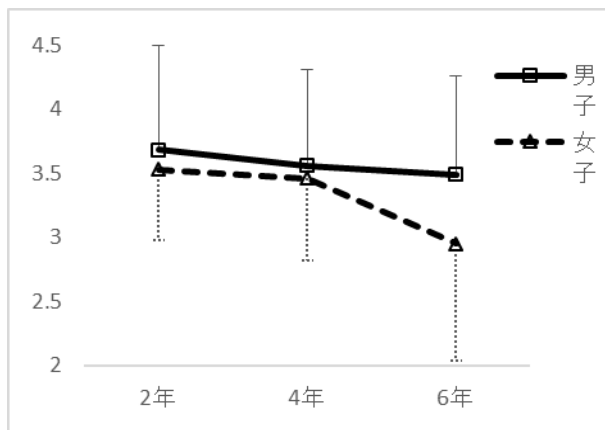


図1 運動の好き・嫌い」と学年×性別の効果

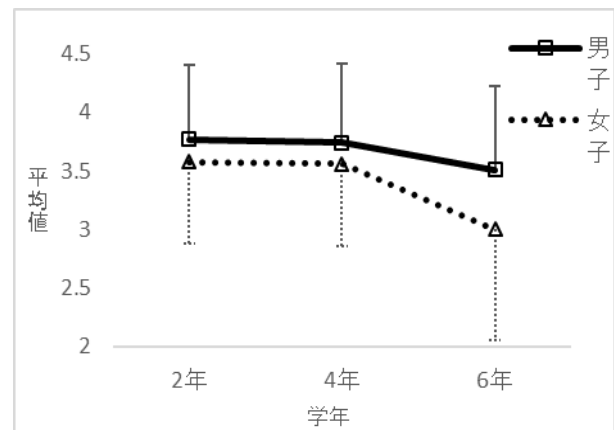


図2 体育の好き・嫌い」と学年×性別の効果

4) 「運動嫌いの体育嫌い」と「運動好きの体育好き」の比較

質問項目において「運動嫌いの体育嫌い」と「運動好きの体育好き」に差があるかを対応のないt検定を用いて分析した結果、質問項目37個すべてにおいて、有意な差が認められた。(p<0.05)特に差が大きかった質問項目が、運動についての質問の「長縄で遊ぶのが好きだ」、体育についての質問の「リレーが好きだ」「長縄が好きだ」であった。これは、深谷ほか(2000)の行った調査において、「運動が好きか」の質問に対する嫌いな理由に「リレーで足を引っ張りたくない」「自分だけできないのはいや」という仲間とのかかわりに関するものがあつたことと一致している。リレーも長縄跳びも、仲間と力を合わせて取り組むことで勝敗が決まったり、達成感を味わったりすることのできる運動である。しかし、うまくできない児童にとっては、自分の失敗がチーム全体の失敗につながってしまうという意識が恐怖や苦痛に感じることも推測される。これらの結果から、学校体育の中では、運動技能の上達に個人差があることを受け止め、個に応じた場や補助具の提供、また、スモールステップのある授業展開など、実態に応じた工夫が必要だと考えられる。また、運動・体育が好きな児童が、運動・体育が嫌いな児童やうまくできない児童に対してどのように関わっていくかを示すことは、「仲間の受容感」を高めるうえで今後重視していくべき点であり、学校体育の重要な役割であると考えられる。

5) 運動・体育が嫌いな理由

運動・体育が嫌いな理由を挙げた質問紙を抽出し、カテゴリーに分けた結果を表5に示した。特に多かったのは、「苦手だから」「うまくいかないから」「走るのが遅いから」という理由であった。これは、深谷ほか(2000)の嫌いと苦手意識の関連を支持する結果となった。また、深谷ほか(2000)は、運動嫌い、苦手意識を持つ児童と「レジリエンス」の関連も示している。木村(2010)は、「レジリエンスには、自己の感情コントロールや肯定的に物事を捉えること、冷静な姿勢などが関連していることが考えられる」と報告しており、本研究の結果で示した「嫌いな理由」からも「レジリ

表3 運動・体育の好き・嫌いと運動種目(遊び)の相関

	2年生	4年生	6年生
	体育授業	体育授業	体育授業
	初めてやる運動があるとワクワクする	初めてやる運動があるとワクワクする	初めてやる運動があるとワクワクする
運動が好きだ	0.386	0.656	0.737
体育が好きだ	0.418	0.713	0.764

表4 運動・体育の好き・嫌いと運動意欲の相関

	2年生		4年生		6年生	
	体育以外の運動	体育授業	体育以外の運動	体育授業	体育以外の運動	体育授業
	ボール遊びで遊ぶのが好きだ	ボール遊びで遊ぶのが好きだ	サッカーで遊ぶのが好きだ	サッカーが好きだ	サッカーで遊ぶのが好きだ	サッカーが好きだ
運動が好きだ	0.603	0.552	0.594	0.592	0.623	0.593
体育が好きだ	0.362	0.385	0.529	0.515	0.605	0.544

エンス」と「運動嫌い・体育嫌い」の関連は推定できる。特に、高学年になると、自分のことを客観的に捉えられるようになることで、周りと比較して自分を評価する傾向が現れてくる。そのため、「自分はどうせできない」という固定的能力観に陥りやすい。体育に限らず、学校生活全体を通して、この固定的能力観を増大的能力観に変えていくようにすることは、児童の「主体性」を育むうえで重要であると考える。

4. 研究1のまとめ

研究1の目的は、運動嫌い・体育嫌いの児童の実態を明らかにすることであった。これらの結果から、運動嫌い・体育嫌いの児童への手立てとして以下の4点が考えられた。これらをもとに、学校体育の改善をめざし、実践研究を行っていくことにした。

- ①個の技能を伸ばす
- ②仲間からの受容・受容的雰囲気
- ③有能感を高める
- ④増大的能力観・レジリエンスを育てる

V. 研究2：運動嫌い・体育嫌いの児童への具体策の検討

1. 目的

運動の好き・嫌いと体育の好き・嫌いには相関があり、まずは、「体育嫌い」を減らしていくことが、学校の大きな役割であると言える。そこで研究2では、「運動が嫌い・体育が嫌い」な児童に対する体育授業の改善が主体的な取り組みにつながるのか、実践事例を通して検討する。

2. 方法

1) 授業実践の概要と授業改善の取組み

小学4年生35名を対象に、2017年6月に研究1で用いた質問紙調査を行い、「運動が好きだ」「体育の授業が好きだ」の項目について「嫌い」の強い児童2名を抽出し、インタビュー調査を行った。研究1の結果と研究2の抽出児童に対するインタビュー調査をもとに体育授業改善の視点を決め、2017年6月から2017年12月まで授業を実施した。

表5 運動・体育が嫌いな理由

2) 6か月間(7月から12月)を通した取組み

運動が嫌いな理由		体育が嫌いな理由	
運動や走ることが苦手	10	苦手だからうまくできないから	13
疲れるのがいやだ	9	嫌いな運動がある	7
けがをしたくない	9	疲れるのがいやだ	5
面倒くさい・興味が無い	6	けがをするときがある	2
室内で遊ぶほうが好き	4	チームワークが悪い	2
好きな運動もあるが嫌いな運動もある	3	自分が失敗すると友達に迷惑をかけるから	1
やる気はあるができない	2	一度も勝ったことがないから	1
ルールがわからない	1	ルールがわからない	1

①わくわくする導入の工夫

運動嫌い・体育嫌いの児童にとっては、苦手な運動や嫌いな運動が多く、運動に入るときの雰囲気づくりが重要である。そこで、体育が楽しみになる雰囲気づくりを目指し、導入時の工夫として、音楽に合わせ、リズムダンスの要素を加えた準備運動を行った。リズムダンスや表現運動は、運動が嫌いな児童でも抵抗感なくできる運動であることが質問紙調査から明らかになっている。動物になりきったり、友達と楽しいダンスをしながら心と体をほぐし、主運動につなげていけるようにした。その際、本時で行う運動につながる動きを取り入れることでけがの防止には十分配慮した。

②運動有能感を高める簡単な運動遊びの紹介

運動嫌い・体育嫌いの児童の嫌いな要因として「苦手意識」が一番多く挙げられた。できない、苦手という気持ちは運動意欲を減退させる。インタビュー調査の結果から、運動嫌い・体育嫌いの児童も「できるようになりたい」という気持ちが強いことは明らかになっており、体育を通して、運動の楽しさを知り、運動とのつながりを作っていくことが重要であると考えた。そこで、家でも挑戦できる簡単な運動、家族と一緒に楽しめる運動を毎時間取り入れ、運動の日常化を目指した。図3は全身を使って楽しくペアで体を動かす運動の例である。体を動かすことの楽しさ、心地よさを感じさせるとともに、運動習慣の増加にもつなげた。

③学校生活全体で作り上げる温かい言葉、雰囲気作り

賀川・竹岡(2002)が、「体育嫌いを変容させるためには、仲間や教師からの受容体験、身体的苦痛を与えないように



図3 運動紹介の例 体でじゃんけん「じゃんけんどっかん」

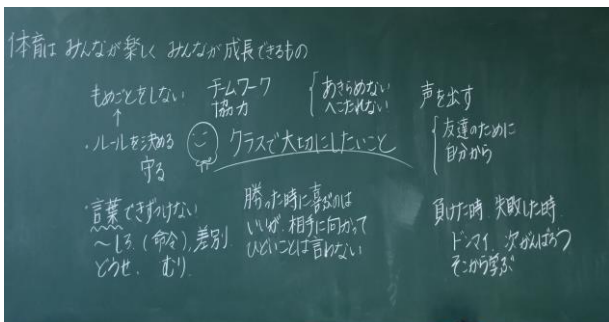


図4 学期ごとの体育開きで行った仲間との関わり方の指導例

させる、仲間に嫌な思いをさせないことなどについて留意が必要である」と示しているとおり、授業の中での受容的雰囲気、また教師、仲間の言葉かけは重要なものである。これらは、体育授業に関わらず学校生活全体を通して考えるべきことである。学期のはじめには、これから行う運動の紹介をし、見通しを持たせるとともに「やる気にさせる言葉」「アドバイスの言葉」を話し合い、体育授業の中で活用した。また、上手くできた仲間、できるようになった仲間へのハイタッチ、掛け声なども決め、体育授業に限らず、学校生活におけるクラス内の受容的雰囲気を高めた。

④温かい雰囲気で行うグループ・ペア整理体操

インタビュー調査から、肯定的な集団であれば、一人で運動に取り組むよりも仲間との関わりがあるほうが楽しく、やる気になるということが明らかになった。そこで、授業の中では必ずグループ学習を取り入れ、仲間と高めあう授業をめざした。また、授業の終わりには、グループやペアでストレッチを行い、仲間と話をしながら温かい雰囲気の中で授業を終えるようにした。コミュニケーションをうまく取れない児童も多いため、意図的に仲間とつながる機会を設けた。

⑤個に応じた関わりを増やすために

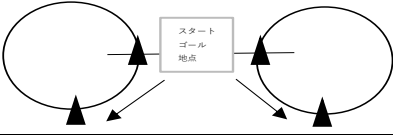
波多野・中村(1981)が挙げた、運動嫌いの背景の中にも「個人差を考慮しない体育授業」「体育教師への不満」「上手・下手による能力評価」があり、仲間との関わりだけでなく、運動嫌い・体育嫌いの児童の嫌いな児童への教師の関わりは大変重要なものである。本人の性格傾向により、かわりを好まない児童、消極的な児童もいる中、児童と教師の関わりを増やすきっかけ作りとして、体育ノートを活用した教師と児童のつながり作りを行った。ここでは、学習カードとしての活用ではなく、わからないこと、不安なこと、嬉しかったことなど、授業が終わった後、自由に記入し、日記のような形で個に応じたかわりを持っていった。その中で、児童の運動に対する思いに迫り、授業作りの検討材料にしたり、自信を持たせる声かけをすることで自信を持たせたりすることで、有能感を高めていった。

3) リレーを題材とした意欲を高める教材の開発

①走ることに意欲を持たせる教材の開発

研究1では、運動嫌い・体育嫌いの理由として走ることへの苦手意識が一番多く挙げられていた。また運動嫌い・体育嫌いの児童の嫌いな運動種目の一つとして「リレー」があった。深谷ほか(2000)の行った調査において、「運動が好きか」の質問に対する嫌いな理由に「リレーで足を引っ張りたくない」というものがあった通り、リレーは、自分の力だけで勝ち負けが決まることはないが、走ることが苦手な児童、自己肯定感の低い児童にとっては苦痛な種目である。そこで、4年生の「かけっこ・リレー」において、運動嫌い・体育嫌いの児童への視点を入れた教材開発を行った。授業の流れは表6に示した。運動嫌い・体育嫌いの児童に対する日々の取組みの加え、「リレー」に対する苦手意識、不安を取り除くことができるよう、技能差が明確に出ず、苦

表6 運動・体育が嫌いな児童への視点を入れた授業の流れ（かけっこ・リレー）

	学習活動・内容	運動嫌い・体育嫌いの児童に向けての視点
1	集合・整列・挨拶・健康観察・服装確認をする	安全に授業を進められるように、児童の健康状態を把握し、元気な挨拶で始める。
2	準備運動をする	楽しくリズムカルに全身運動を行い、本時への意欲を持たせる。
	・音楽に合わせた準備運動 ・ワクワクタイム（ペアで体ほぐし）	ペアで体ほぐしの運動を行い、友達と関わりながら、心と体を開放させ、主運動への意欲につなげていく。
3	本時のねらいを確認する	分かりやすい言葉で本時のねらいが明確になるようにする。
	・グループトーク（振り返りとめあての確認、今日の調子の確認）	前時の振り返りやめあてを伝え合い、仲間の状態、気持ちを共有する。
4	パワフルタイムを行う。	動きのポイントを示し、簡単な運動の繰り返しで技能の向上を目指す。 ・カーブ走（カーブでは体を傾けて外側の腕を振る・かかとから踏み出す） ・しっぽとり追いかっこ（走りながら友達にタッチする・パスをする）
5	作戦タイムを行う。	パワフルタイムで行ったことをもとに、グループで練習を選んで行ったり、話し合いを行ったりして、ゲームへの意欲をさらに高めていく。
6	サークルリレーを行う	対戦相手に勝つことだけでなく、スムーズにカーブを走ったり、バトンパスをつないだりすることをクラス全体で大切にしていく。 
7	本時の学習の振り返りとまとめを行う。	めあてに沿った振り返りで次時に向けての課題をしっかりと持たせる。
8	スッキリタイムを行う。（ペア整理運動）	友達と今日の様子を話し合いながらストレッチを行い、リラックスした
9	挨拶をする。	気持ちで授業を終えるようにする。

手な児童も得意な児童も共にやりがいを感じられるような場の工夫を心がけた。

②走る動作のコツの可視化

抽出児童2名以外にも、走る動作がスムーズにできない児童は見られた。本単元を通して、走るコツをつかみ、他の運動への自信につなげていくことを期待し、「走ること」についての学習を行った。「走る」ための多くの要素の中でも、リレーのカーブ走にとって必要な腕の振り、走る時の足の踏み出し方の2つを取り上げ、それらを可視化した。動きと言葉を図や言葉にすることで友達同士の声掛けにつながった。

3. 結果と考察

1) 抽出児童の変化

抽出児童2名のインタビュー調査の結果は、表7・表8に示した。

6月のインタビュー調査では、抽出児童2名とも、苦手な運動はやりたくない、不安という様子が見られたが、苦手と挙げていた運動種目にも主体的に取り組むことができた。児童Aは、6月の調査で嫌いとして挙げていた長距離走について「毎日の朝マラソンに取り組む中で自分の体力が上がってきたことがわかり、持久走大会で最高記録を出すことができた」と回答していた。児童Bは、苦手、不安に感じていた「跳び箱運動」について、「はじめは怖かった台上前転ができたときに楽しくなった」と回答していた。運動嫌い・体育嫌いの児童に向けて、技能差が明確に出ないような教材開発、動きのコツの可視化等を行ってきたが、抽出児童2名に一定の成果が得られたと言える。苦手な運動で

伸びが感じられたり、できるようになったりした経験は、他の運動種目への意欲にもつながっていったことも、インタビュー調査から明らかになった。

2) 特に効果的と考えられた取組み

運動に意欲的に取り組むことができた大きな理由として、仲間からの受容、受容的雰囲気が大きかったことがインタビュー調査の結果から分かった。運動に自信が持てない中、自分一人で運動に取り組むよりも仲間と共に楽しく運動したい、という思いは6月のインタビューの時点から見られた。本研究で活用した体育カードの中で、運動嫌い・体育嫌いの児童が一番多く書いていたのは仲間とのかかわりについてであった。他の児童は、どうやったらできるようになるのか、自分がどうなりたいか、ということを書いているのに対し、抽出児童2名は、仲間との関わりから感じたこと、嬉しかったこと、自分の目標とする友達などの内容が多く見られた。1月のインタビューでは、仲間とやった運動の楽しさ、できないことを仲間と一緒にやったことで自信がついたこと、教師の言葉かけでやる気がわいたことを挙げており、仲間や教師からの受容体験は、運動への意欲づけに大きいことも明らかになった。体育は、活動範囲が大きく、教師の目の届く範囲での活動が限られている。そのため、体育に限らず日頃から受容的雰囲気、仲間とのかかわり方を育んでいく、また必要に応じて指導をすることが大切である。

4. 研究2のまとめ

授業実践と抽出児童の変容から、運動嫌い・体育嫌いの児童に対する体育授業改善の視点として以下のことが挙げ

表7 運動・体育が嫌いな児童へのインタビュー調査（6月）

研究1の 考察から	質問内容	児童A	児童B
運動・体育について (技能向上・受容感)	小さい頃はどんな遊びをしていたか	外でよく遊んでいた	人形で遊んでいた。外遊びはしない。
	いつから運動が嫌いになったか	1年生	幼稚園
	運動が嫌いになったきっかけ	遊具で遊んでいて落ちて怖くなった	もともと動くことが好きでない
	いつから体育が嫌いになったか	1年生	1年生
	体育が嫌いになったきっかけ	怖かったことを思い出す。できないものがある。	動くことが好きでない
	嫌いな運動は何か	鉄棒運動 跳び箱運動 持久走	走ること
	なぜ嫌いなのか	自分だけできないといやになる	動くことが好きでない
	どんな運動が好きか	チームで行う運動	テニスを習ったことがあった。楽しかった。
有能感・レジリエンス	自分はどんな性格だと思うか	まわりの人から元氣といわれるが自分では違うと思う。	よく失敗する
	どうしたら運動が好きになると思うか	チームで行う運動がいい。楽しくできるという。	できなかったことできたらうれしい。

表8 運動・体育が嫌いな児童へのインタビュー調査（1月）

研究1の 考察から	質問内容	児童A	児童B
運動・体育について (技能向上)	体育の授業はどうでしたか	みんなとやるから運動が楽しい。自分に合わせてみんなもやってくれた。	楽しい。みんなと協力してやったり自分ができることが楽しい。
	できるようになった運動はありましたか	持久走で順位が速くなった。	無理だと思ったけれど台上前転ができるようになって初めて跳び箱が楽しいと思った。
	上手くできなかった運動はありましたか	ボール系の運動。ティボールは楽しいがうまくできなかった。	鉄棒
仲間からの受容	体育の授業中に友達から笑われたり馬鹿にされたことはありましたか	ない	ない
	友達に教えてもらったり、教えてあげたりすることはありましたか	運動が苦手な友達の気持ちがわかってあげられるようになったのがうれしい。	していない。教え合いはした。
有能感・能力観・レジリエンス	運動することに自信は持てましたか	自信ついた。	自信ついた。
	自分を変えたのは何ですか。	チームのおかげ。	いつも先生が頑張ろうと声をかけてくれたから。
	5年生になっても頑張れそうですか	新しいクラスになり自分のことをわかってもらえるか不安でも頑張れそう。	頑張れる。

られる。

①仲間と関わり合う良さ、楽しさを味わわせるような運動の導入

②受容的雰囲気高める言葉、関わり方の指導

仲間や教師の受容、受容的雰囲気が運動嫌い・体育嫌いの児童の安心感を生み、体育での主体的な取り組みにつながる事が明らかになった。抽出児童2名とも、体育について「みんなとやるから楽しい」と答えていたが、ここから共に運動する仲間の受容的雰囲気を作り出す重要性も明らかになった。また、1月のインタビュー調査において、次年度、クラスが変わった時の仲間への不安もすでに感じている回答があることから、体育授業における仲間・教師からの受容の大切さをすべての教員が周知し、授業を行っていくことが、学年進行による体育・運動嫌いを減らしていく手立てになることも推測できた。

VI. おわりに

本研究の目的は、運動の二極化において問題とされている「運動嫌い・体育嫌い」の児童の実態、傾向を明らかにし、学校体育の改善・充実を図ることにより、主体的に運動に取り組む児童の育成を目指すことであった。

研究1では、質問紙を用いて調査し、小学生322名から回答を得た。質問項目は、体育の単元で扱っている運動、またはそれに関連する日常の遊び・動きを取り上げて構成し、「4・すごくあてはまる、3・ややあてはまる、2・あまりあてはまらない、1・ぜんぜんあてはまらない」の4件法で質問した。統計的な分析の結果、運動の好き・嫌いとは体育の好き・嫌いには相関があり、運動嫌い・体育嫌いの児童への手立てとして、個の技能向上、仲間からの受容・受容的雰囲気、有能感・増大的能力観・レジリエンスを育てる重要性が明らかになった。

研究2では、「運動が嫌い・体育が嫌い」な児童を抽出

し、運動嫌い・体育嫌いの児童に視点をおいた体育授業の改善を行い、それが主体的な取り組みにつながるのか、授業実践を通して検討した。インタビュー調査の結果から、運動嫌い・体育嫌いの児童に対する効果的な体育授業改善の視点として、仲間と関わり合う良さ、楽しさを味わわせるような運動の導入、受容的雰囲気を高める言葉、関わり方の指導が挙げられた。特に、仲間や教師の受容、受容的雰囲気が運動嫌い・体育嫌いの児童への安心感を生み、体育での主体的な取り組みにつながる事が明らかになった。

主体的に運動に取り組む児童の育成において、まずは、「体育嫌い」を減らしていくことが、学校の大きな役割であると言える。また、小学校のできるだけ早い段階から「運動嫌い・体育嫌い」を生み出さないようにしていくことが重要であり、これは生涯にわたって運動に親しむ児童を育成において大きな課題である。これからの学校現場では、児童が運動の楽しさやできる喜び、できるかもという期待を感じることができるよう、より一層体育授業を充実させることが求められている。また、体育に限らず、学校生活全体を通して児童の能力観を育み、主体性へとつなげていく必要がある。

本研究では、学校での主体的な運動への取り組みについては一定の成果が得られたが、学校外での運動への主体性についてはまだ変容が見られなかった。今後は、生涯にわたって運動に親しもうとする児童・生徒の育成を目指し、学校外との連携を視野に入れながら研究を進めていきたい。

引用文献

- ドゥエック：今西康子訳（2008）「やればできる」の研究。草思社：東京
- 深谷和子・及川研・小川正代・猿田恵一・吉野真弓（2000）運動の苦手な子。モノグラフ・小学生ナウ，20（1）：1-83.
- 古田久（2014）運動不振学生の体育授業における「つまずき」経験。埼玉大学紀要，63（1）：375-386
- 波多野義郎・中村靖男（1981）運動嫌いの生成秩序に関する事例研究。体育学研究，26（3）：177-187.
- スポーツ庁健康スポーツ課（2016）平成28年度体力・運動能力・生活習慣等調査
- 賀川昌明・竹岡真一（2002）小学校高学年児童の体育授業に対する好意度を決定する要因分析。鳴門教育大学学校教育実践センター紀要，17：159-165.
- 木村亜弥子（2010）運動実施者におけるレジリエンスと感情コントロールに関する一考察。心理学研究，創刊号
- 松平宗之・高井和夫（2010）子どもの運動意欲を支える心理社会的要因。文教大学教育学部紀要，44：129-142.
- 立木正（1997）体育嫌いを生み出す原因に関する研究。東京学芸大学紀要，49：191-201.
- 文部科学省中央教育審議会（2016）幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について

吉川麻衣・山谷幸司・笹生心太（2012）「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究—小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と「体育嫌い」の関連性に着目して—。仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集，13：107-115.